

広島俳句倶楽部

令和六年十二月作品集

近江 暁子

十月中旬、広島俳句倶楽部の吟行旅行で、近江の湖北を巡ってきました。古来、この地方は、奈良・京都の都と越を結ぶ文化の道であり、戦国時代には、一大合戦の地になった所で、一度は訪れたいと思っていました。佐保先生、高尾さんの行き届いたご配慮のおかげで、この上もなく楽しい旅になりました。肝心の俳句はありますが、その時感じたままを詠んでみました。

ひとときの秋雨が過ぎ中山道

澄む秋の水豊かなる橋に来る

渡岸寺桜もみちを踏んでゆく

鶉のよく鳴いて近江の朝かな

秋草を分けて琵琶湖の岸に立つ

行く秋の琵琶湖の水を掬ひけり

色草の上のリフトに揺られをり

名の知らぬ色鳥渡り賤ヶ岳

佃煮屋出れば俄かに秋しぐれ

山並みの一つに比叡秋澄めり

《作品鑑賞》

知佳子

学びを重ねた作句の基礎に裏打ちされた、しなやかで新鮮な俳句を作る暁子さんの吟行句を、楽しみ、学ばせていただきました。

澄む秋の水豊かなる橋に来る

澄んだ水の流れの速さ、絶え間ない水音、水に乗り流れる花や葉、浮き沈みする水草、傍流が加わり向きを変える流れ、いくから見ても飽きない水の豊かさです。

秋草を分けて琵琶湖の岸に立つ

行く秋の琵琶湖の水を掬ひけり

行く秋を惜しみながらも、湖に近寄り、手に触れる水を慈しみ、琵琶湖の自然に身を委ねる楽しさが伝わります。

山並みの一つに比叡秋澄めり

山々の名を教わるのも吟行旅行の有難さ。「あれが比叡ですか。」「どれですか?」など、句友と肩を並べながら秋の山を眺める喜びが伝わります。

だんじりに付いて古道を歩きけり

秋の蝶風に吹かれて寄つて来し

秋風の集まる村へ下りけり

色鳥の山に隠るる古道かな

郷原にまだ音立てて秋水

大根を取り入れてる横歩く

茸狩と言葉を交し古道ゆく

冬の霧やうやく晴るる古道かな

古道へと庭の落葉が掃きこばれ

冬菊も鯉も見えなくなる日暮れ

佐保光俊

旅立ちを明日に眠れぬ星月夜

秋の雨竹生鳥伊吹山を隠しけり

秋雲の伊吹山を友と見上げけり

湖にはや鳩の来てもぐりけり

友と来て丹波篠山薄もみぢ

木道に雉ゆつくりと隠れけり

岩の上よく日をうけて大文字草

一面の野菊に鳥の隠れたる

篠山の寺に茶の花二つ三つ

風のなきひと日を銀杏落葉かな

高尾ひとみ

寺の庭公孫樹落葉を拾ひけり

杖をつき踏みしめ歩む落葉かな

寒き夜や時をり響く飛行機音

裏山が冬夕焼に染まりけり

一杯の白湯に始まる霜の朝

出港の銅鑼の冴えたる朝かな

耳遠き友と話して日向ぼこ

冬の月螢の島より昇りけり

冬うらら曾孫と楽しく遊びけり

三越の重き扉や日記買ふ

あざみ

十一月車掌の歩く靴を見る

空に浮く鳥は遠くへ冬めける

百日紅の枯景踏みゆく家路かな

大木の下で見上ぐる冬の空

ひとつつつ冬木の名札見て歩く

冬川の土をしきりに鳩つく

しぐるるや市電曲りて橋渡る

大学の冬木の丈の揃ひたり

横向けば寒柝の二打響きたる

立つて聴く吹奏樂や十二月

亞矢

水郷の冬あたたかき近江かな

芭蕉さんてう呼ぶ人や冬の湖

水影はなほもきよらに山眠る

須佐之男の君に見惚れて里神樂

片恋の吾のひとりの焚火かな

大北風のごとく吾子への怒りかな

おそるべき吾子の食氣や十二月

寒灯で照らせる吾子の道明し

行く年や友と旁はる不惑の身

書き留めし言の葉あまた年の暮

綾乃

新蕎麦を待ちつつ昼の酒とする

稽田に降りて立ちたる鴉かな

例祭の本殿の脇菊残る

歳元の新酒を比べ酒祭

保育所の十一月の朝顔よ

犬と座す川辺に桜紅葉散る

冬服の犬に駆け寄る子らの声

朝影に綾なす川に鴨の来る

冬鷺の付かず離れぬ番かな

高齢の後期となりぬ竜の玉

井藤希

散る公孫樹そのままにして眺めをり

残る実には鶉の声して冬の空

姉の忌の柁の花香りたり

山茶花のつぎつぎと咲く蕾かな

山茶花に朝日の差して匂ひけり

我が庭のいつもの場所に冬の薔薇

玄関に散り敷く落葉踏んで行く

まっすぐに公孫樹落葉の道つづく

小雨降る寺へと道は冬枯れて

告知後の空の青さに冬の雲

落葉焚く楽しみ里の夕べかな

日のあれどしぐれ易きよ峽住ひ

日当たればしだいに寄りて鴨の群

鈴植に雀来てゐる冬うらら

着飾れる幼子に鳴き冬鴉

禊子像へ歌ふ揃ひのアノラック

入れ替り冬の鳥来る供養塔

実堤に冬日を浴びて猫二匹

産土は一面霜の降る朝か

行く人の煙をくぐる焚火かな

楓紅葉夕日を浴びて濃かりけり

街路樹の伐られ残りの紅葉揺る

隧道を越せば時雨の強くなり

山茶花の生垣の中雀群れ

山茶花の花びら拾ふ下校の子

日短散らかしたまま夕餉かな

いつもこの垣に綿虫生まれたる

病む姉に贈る手編みの冬帽子

鰯酒に酔うて笑ひし友の逝く

人居れば炬燵居なくば本を膝

大畑恵

暁子

すみれ

一本に一輪咲いて冬薔薇

鳥の声聞き分けてをり冬青空

二羽もぐり一羽こちらへかいつむり

鳴きながら西から東冬の鳥

二羽の鴨鳴き交はしつつ寄り離れ

冬晴や木々それぞれに影落とし

散りしきる山茶花両手に受けにけり

寒林を揺すりて鴉飛び交ひぬ

枯芝を啄む鳩に風強し

地下街に紛れ込みたり寒雀

知佳子

小さき諸母のおやつに焼いてをり

松茸の生える頃かと母の聞く

茸山へ吾子と渡りぬ丸太橋

昨日採りし松茸母に見せに行く

母や孫に会ひに行けない風邪ごもり

真夜中に赤子の蒲団掛け直す

真夜中に綿入を着て授乳する

風邪引いて赤子の側に寝る母よ

冬座敷曾孫の四人駆け回る

冬の星子に誘はれてウォーキング

ちどり

紅葉散る原村までの坂長し

時雨るるや富士山頂は雪降るか

ドライブの何処も彼処も冬紅葉

町回る太鼓の響き小春空

旅に出るまでを樂しむ冬の夜

霜の夜や薬も入れて旅鞆

冬霧を抜けて白樺林ゆく

噴水の秀が伸びてゆく冬青空

冬晴や相生橋は丁字形

霜白し命尽きたる飛蝗手に

辻純江

通夜清んで月を見上ぐる帰り道

ひと日終へ窓から月を見上げたる

干柿の食べ頃まだか触れてみる

先に見て紅葉並木を指摘したる

数石に落ちし紅葉を踏まぬやう

散り落ちし木の葉一枚手に取りぬ

ひと足ごと音を鳴らして落葉踏む

福達磨摩つて願ひ言つてみる

初乗や運転士へとお辞儀して

風揚げの同じ系引く兄いもと

雲雀

元旦や忘れていたよ金の食器

初雀わらわら集う精米所

初日の出列車の人も見ろだろう

元日も昼寝している祖父母かな

変身の買初寒冷地仕様

福袋結局役に立つた菓子

帰宅して背筋の伸びる松飾

冬薔薇花瓶の薔を撫でてやる

いいことは見つけられるか初鏡

グラス持ち年酒を飲める子になりて

ふじ女

吊し柿いただき本家後にする

公孫樹落葉しやりしやり歩く並木道

爪先で蹴りながら行く落葉道

ひとりでに鼻歌の出る落葉極

重なりし落葉の底の湿りかな

山茶花の一夜の雨に崩れけり

連れ添うて氷魚を食ぶる湖北かな

高齢の後期となりぬ花八手

眉月をひとり見てゐる十二月

紫のポインセチアを友に買ふ

松田裕子

粧へる山よりダム湖見下ろせり

人力車落葉を踏んで走りたる

店先にポインセチアを並べ置き

鉢の花日向に並べ冬浅し

小春日の道音段よりゆるり行く

ジェット機の音響きたり冬の空

オリオンは山より上り来りけり

返つる朝皇帝ダリア咲き聳ゆ

初雪やテニス部素振りしてゐたる

拭きし窓眠れる山を映したり

村上正人

秋の日や園児の列の通り過ぐ

遠嶺ほど茜濃くして里の秋

引く綱の重きに揺れて鰯船

雨に葉の音荒ぶりにて破蓮

自墮落に見ゆる病臥や冬隣

見上げをる口はへの字の懐手

車椅子一列にして日向ぼこ

黙読の窓に日の差す枯葉かな

寝違へに「そこ」と背をさし紙懐炉

厨事妻にまかせて年用意

森口良樹

電飾の飾りなかばへ初時雨

小春日や新生児抱き退院す

スキップに揺るるボンボン冬帽子

ゲージ表の目盛を数へ毛糸編む

椅子ごとに膝掛のあるカフェテラス

メタセコイア凍てつく空に届きさう

北風に両の手擦る駅ホーム

マスクして身振り手振りのサンタ来る

川向う火の用心の声近し

山野ウタ

赤い実をついばむ小鳥空渡し

露の朝ワイパー使ひ出勤す

風に揺るる車の上に月

ささくれし指で活けたる冬椿

鶴の声に心昂り小走りす

毛糸買ひ心のままに編んでみる

廃校でひとり竹馬雀来る

を

里神楽夜空に広く響きをり

独り居の気兼ねすることなき嚏

手足跳ね吾子の嚏のくつしゆんと

4Bで漢字練習冬休

メモを手にもつはコーヒー年用意

手袋に伝はる温さパンを買ふ

大原良子

バーベキューして見上げをり冬の虹

冬の駅しづかに雨の降り始む

黙禱のドームへと散る冬紅葉

本川の波間に映る冬の月

寄鍋を囲みて眼鏡曇りたり

水鳥の今日は離れて浮かびをり

上島康子

挽ぎたての林檎を配り句座につく

冬靄の瀬戸に灯せる沖の船

息白く下弦の月を友と見る

足早に下る坂道年用意

墳丘を縁取る埴輪冬ざるる

屑米を撒けば飛び下り寒雀

寺町に喚鐘聞こえ冬日和

せせらぎの淡き日差へ木の葉散る

冬滝の音の方へと登りけり

冬滝の前に進みて仰ぎけり

滝の音してゐるばかり冬薄暮

冬の夜の襖隔つる受け答へ

冬の旅櫓見学から始む

柿紅葉古希のガイドの心地よき

街道を上り下りの小六月

小春日や待ち合せする一里塚

風花や資料館への列長き

組板をホースで洗ふ十二月

熊谷ゆり子

桑門わかこ

高梨英子

時雨るるや橋の向うは日の差して
掃き寄せる落葉の上に葉の落つる
冬木立鴉呼び合ふ声のして
今日もまた夫と寄鍋つきをり
湯の滾る音の響きて冬座敷
着ぶくれて歳時記めくる夜半かな

撫子

秋澄めりビルの形のくつきりと
秋の草凭れ合うては花をつけ
秋草を束ね墓前に供へけり
憧れは用立てから散る木槿なり
秋暮るる今日の一日もつがなし

須美れい

運動会組体操の吾子どこに
マラソンの抜かれて歩き秋澄めり
秋晴や男子校から歌ふ声
吾子帰り林檎を二つ手に渡す
息子来て話の弾む星月夜

土肥律子

幼子のただいまの声小春日よ

重ね着しいつもの道を足早に

息白く孫の後ろをついて行く

冴ゆる夜に打ち上げの声響きけり

冬ごもり億劫となる部屋掃除

古川廣子

桔芙蓉母の好みし籠に挿す

冬雀庭掃く側に二羽三羽

遠山の初冠雪に朝日差す

納屋裏で香つてゐたる枇杷の花

侘助に夕日の差して暮れてゆく

美耶

耳に吹く風に佇む十二月

取りあへずメモに書き留め年用意

別れ際千両切つて手渡され

寒菊の金網抜けて玉と咲き

寒空に青信号のきらめけり

やす保

北窓を塞いで過ぎす二階かな

甘藷もて代用食とせしあの日

七五三ピースサインのポーズとり

買物に入りてゐし間に雪積もる

月白に神宮の衣擦れの音

注連縄を叩く杵の柄重きこと

雪の無き木の陰遊び歩きをり

小走りで上る坂道冬隣

注連作り胡坐の指を赤くして

雪の道雲の途切れて日の差して

濡れ縁の切干大根子に持たす

薄氷の踏まるる前に解けてをり

紀英子

高嶋絹代

民

窓際に猫の爪切る小六月

救急車遠く近くに夜半の冬

樽漬けの冬菜をもとめ道の駅

体調の良き日悪しき日年暮るる

みさ子

七五三神社に長き列つづき

手を伸ばし蜜柑一枝取りにけり

歳末の売出し広告多くなり

河原静子

柿紅葉三段跳の足の跡

上着手に江田島を行く冬浅し

冬うらら五橋を映す錦川

桜陽

秋澄んで今日生まれると知らせあり

朝寒やノート片手に電車待ち

休日に煮物を炊いて柚子刻む

山崎桂子

令和六年十一月度作品集より

あざみ 私の選んだ十句

どの谷の奥の奥にも稲咲かせ	佐保光俊
茶室への道のあちこち萩こぼれ	高尾ひとみ
鳥声の重なり合うて秋ぐもり	亜矢
子の開く合格通知金木犀	綾乃
秋高し速く見下ろす余呉湖かな	井藤希
夜なべして母は綿入れ縫うてくれ	大畑恵子
弥山嶺は雲に覆はれ冬隣	暁子
屋号で呼ぶ村の生家や山粧ふ	すみれ
神楽舞ふそばに幼子眠りをり	ちどり
湯豆腐を取分け母に持ちゆけり	村上正人

亜矢 私の選んだ十句

秋川を離れて古墳へと歩く	佐保光俊
石落の花庭のいつもの片隅に	大畑恵
帰り花高速船は沖へ消え	暁子
灯台へ道細くなる水引草	辻純江
山頂の雲のちぎれて空高し	松田裕子
父の通夜卓に置かるる蜜柑かな	桑門わかこ
低山に雲の懸かりて冬に入る	撫子
寒鴉誰かの荷物見てをりぬ	上島康子
秋高し迷うてみたき古道かな	土肥律子
木々に吹く風音を聞き美術展	古川廣子